

国境を超えて人の命に向き合うということ

私はこれまで発展途上国の支援活動をしてきた。アフリカで感染症対策に関わったことがきっかけとなり、医師として国際医療に貢献する決心をした。2010年10月に滋賀医科大学に学士編入し、現在は医学の習得に励んでいる。本作文では、私が医師を目指す原点となったガーナでの活動や、そこから私が学び考えたこと、その経験を生かし私が将来目指す医療、そして女性医師として私にできることについて述べたい。

私は、アメリカの大学で国際関係学を専攻し、政治・経済・世界史・社会学・文化人類学など様々な分野から世界情勢を学んだ。留学時代は世界各国から集まった学生との交流を通じ異なる文化や価値観に対する理解を深めた。大学中に旅行したアジアの国々で貧困問題を目の当たりにし、発展途上国で貧困問題に直面して暮らす人々のために何か自分が役に立てることがないかを考えるようになった。

大学卒業後は、国連や外務省をはじめとする様々な団体が行う途上国支援に関連する業務に従事してきた。国際協力の最前線で働きたいという思いから、青年海外協力隊に参加し、ガーナで2年間ボランティア活動を行った。そこでの活動が、私が医学を志すきっかけとなった。

赴任先のガーナ北部は、水や電気の供給が乏しく、道路も未舗装という、国内でも特に開発が遅れ貧困問題が深刻な地域だった。サハラ砂漠に続く乾燥地帯で、井戸の水さえも枯れてしまう乾季には、作物が育たない、生活に必要な水もない、など水不足は常に住民の心配の種だった。乾季になると、村の人々は村の外に大きく掘ったため池に雨季の間に溜まった水を汲みに行き、生活のための水として使用していた。料理用の水も、洗濯用の水も、人の飲み水も、家畜の飲み水も全て同じ水源だった。

このような不衛生な水環境が原因で、ギニアウォームという寄生虫症が地域特有の健康問題になっていた。私は、感染症対策チームの一員として、感染地域の村落を巡回し、ギニアウォームの罹患者探しと住民への予防教育に努めた。ギニアウォームに感染していても診療所が遠くて治療を受けにくいことのできない罹患者が多いため、村落で家庭訪問による患者の早期発見と治療が感染拡大防止のキーであった。

ガーナをはじめとする発展途上国では貧困地域の劣悪な環境での生活により感染症にかかり、適切な医療が受けられず、日本では死に至らないような感染症や疾病で亡くなる人々が大勢いる。病気になっても病院が遠い、お金がかかる、といった理由ですぐに治療を受けられず、病態が悪化してから治療を受けるため医療費も高くなり、手遅れの場合は葬式代もかかり、家計はますます困窮してしまう。このような疾患と貧困の連鎖の悪影響を断ち切り、住民の生活改善や地域の経済発展を図るには、そこで暮らす人々の生活の基盤となる健康を確保することが重要である、と考えるようになった。

政治や経済に起因する国レベルでの貧困問題は、個人の力で解決することは容易ではない。しかし、医師は、貧困が作り出す健康被害に対応することができる。また、予防対策により疾患を未然に防ぐことで、住民の健康増進にも寄与していくことができる。このようなことから、私は、医師として、疾患の予防と治療の両側面から人々の命に向き合いたい、と思うようになった。

命の尊厳に国籍はない、それが私にとって国境を越えて人の命に向かい合うことの意義である。具体的に自分が医師としてどう国際保健に関わっていくかはまだ模索中ではあるが、社会的弱者に優しい医療を目指し、なんらかの形で国際医療に貢献していければと願っている。

最後に、女性医師として私にできることについて考えたい。正直、これまで私は自分が女性であることの利点よりも、女性であることで不利に感じることの方が多かったように思える。イスラム教圏であったガーナ北部では、女性の社会的地位が低く、近年やっと女子の初等教育が始まったものの、村の女性の識字率はまだ低いのが現状である。外国人とはいえども、女性というだけで相手にしてもらえず、歯がゆい思いをすることも少なくはなかった。

そんな中でも、今思えば私が女性であったからこそよかったこともある。ギニアウォームは水汲み労働に従事するこどもや女性に感染することが多かった。そのため予防教育では、学校教育や各家庭での母親を対象として重点的に行った。母親への保健教育は、私が女性であったからこそ家庭訪問の際に母親達に快く受け入れてもらえたように思える。

また、各家庭で保健教育を行っていると、母親から家族が抱える様々な健康問題の相談を受けることが多かった。このように、家族の健康に一番関心があるのがたいていは母親であり、途上国では母親の教育水準により家族の健康状態

に大きな差があることから、地域住民の健康増進には女性への教育が重要である。さらに、女性への教育は女性のエンパワメントにもつながる。感染地域での活動を通じ、母親に疾患や予防に関する新たな知識を与え、家族の健康管理における母親の重要な役割を認識してもらうことは、自ずと村の女性のエンパワメントにもつながっていたのではないかと思う。

女性医師として私ができること、それは母親へのアプローチであり、家族へのアプローチであり、最終的にはコミュニティや地域へのアプローチにもつながる。女性の強みを生かして地域の健康増進に寄与していきたいと願っている。

昨年ガーナはギニアウォームの罹患者数がゼロになったことを発表した。間もなく撲滅宣言がなされることだろう。感染症対策チームによる地道な予防教育と住民の行動変容がこの成果に結び付いたのだと思う。そのプロセスに少しでも関わることができたことを私は光栄に思う。私に様々なことを教えてくれたガーナでの日々を忘れずに、今後も国境を越えて人の命に向き合っていきたい。

渡邊真理